フリーナイン　～焼野原青年の悲劇～

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フリーナイン　～焼野原青年の悲劇～

【Ｎコード】
Ｎ２９９３Ｂ

【作者名】
スグル

【あらすじ】
『あなたの悪夢、吹き飛ばします。なんでも屋（有）フリー・ナイン。代表、焼野原九乃助』

＋1話「サンタ否定を継ぐ者」（前書き）

この物語は、この作者が数ヶ月まで書いた「フリーナイン」の外伝的な作りになってます。
ので、お手数ですが「フリーナイン」から読んでから、本編を読んで頂けると幸いです…。
現在、「フリーナイン」が連載中断となってますが、時事のイベントに合わせて書いた軟派な構成になっています…。
それでも、宜しければどうぞ…。

＋1話「サンタ否定を継ぐ者」

……

雪の降らない十二月のＳ県Ｋ市。
どうやら、地球の温暖化は深刻のようだ。
だが、もっと深刻な男がいた。
その男は、現在、高級ブランド店の店前で、ヤンキー座りをして、
煙草を吸いながら己の財布を見つめている。
男の財布には、壱万円だけ。
冬の気温と同じように、寒い財布の中身だ。
「やっぱ、買えねぇよな…」
そう呟くのは、地獄のなんでも屋、フリーナイン事務所の代表こと
焼野原九乃助。
彼は悩んでいた。
何故なら、あと４日でクリスマス。
そのクリスマスという、イベントが関係しているから。

話は、数時間前に遡る。

……

彼の住むボロアパート。
管理人さんのオバサンが、アパート前で浮かれながら、ジョン・レ
○ンのクリスマスソングを鼻歌していた。

「ねぇ、九乃助さん」
と追われ身の少女、レビンは九乃助の部屋に現われた。
部屋には、テレビゲームに夢中の純太少年と、漫画読みながら煙草

を吸う九乃助が居た。
「なんや？」
「もうすぐ、クリスマスですねー」
ぎこちなく彼女は言った。
「だから…？」
九乃助は、口から煙を吐き出す。
「いや…、その…」
レビンの態度が、おどおどしている。
九乃助は、煙草を灰皿に押しつけた。
「俺はガキの頃、親父に…」
そう言って、九乃助は自分の子供の頃のことを語り始めた。

……

「父ちゃん！父ちゃん！」
当時、五歳の九乃助が父親、マサシに近寄る。
この日は、クリスマスだった。
「冬馬君がサンタさんから、ガンダムのプラモデルもらってー。僕も欲しいなー」
そう無邪気に、九乃助が言う。
だが彼の父、マサシは平然としている。
「サンタさん、うちに来るかなー」
そう言う我が子、九乃助にマサシは悲惨な一言を放った。

「サンタなんか、いねぇ…」

その一言で、五歳の九乃助は固まった。
「あれは、玩具会社の陰謀だ。あと、ケーキ屋とか…」
五歳の子供に、普通は言わないし、言えない台詞をベラベラ喋った。
「大体、仏教の日本が…」

ここからの台詞は、なんか怖いからカットさせてもらう。
父親のまさかの言葉で、幼いながら、九乃助はサンタが居ないことを知る。
こんな親だったから、彼はグレたのだろう。

この出来事以来、毎年、九乃助はクリスマスのたびに小学校、中学校、高校に、クリスマスに対する怨念を表現するような名言を残した。

その一部を紹介しよう。
「本当のクリスマスプレゼントとは、玩具会社に来るクリスマスでの売り上げだ（焼野原九乃助、小学校卒業文集『つちのこ探し行って、レスキュー呼んだ遠足』より）」
「親父は、子供の頃、枕上にクリスマスプレゼントがあり、その隣に、俺の爺さんが、うっかり落としたクリスマスプレゼント購入時のレシートがあって、サンタが居ないことを悟った（焼野原九乃助、中学校卒業文集『カワサキのゼファーを借りて、すぐ板金送りにした日』より）」
「こんなに苦しいのなら…、こんなに悲しいのなら…、クリスマスなど要らぬ！！（焼野原九乃助、高校卒業文集『一つの夜の祭り』）」
以上のように、九乃助がクリスマスに対する怨念はすざましい。

……

「ってことだ…」
自分の過去を話した九乃助は、大きく息を吸い、タバコの煙を吐く。
その話を聞いて、純太、レビンの顔は固まっていた。
そして、今の九乃助が存在する理由が理解する。
「だから、クリスマスのパーティーなんざ絶対やらんし、クリスマ

スプレゼントなんざも買わん！！！ケーキなんざ食わん！！日本人は、お茶とヨーカンだ！！！だっははは！！」
調子に乗ることでもないのに、調子に乗った九乃助は勢いづいて、そう言った。
だが、レビンの表情は曇る。
少し複雑な表情だ。
さらに、もう一声、九乃助は言う。

「クリスマスプレゼントなんざ、いらんわ。大体、もらって喜ぶバカ居るかよ」

その一言で、レビンの頭の中で、なにかが切れた。
彼女は、そのまま、テーブルでくつろぐ九乃助の元まで駆けた。
「ん…、どった？」
近づいてきたレビンの顔を、九乃助は眺めた。
そのレビンの目は涙ぐんでいる。
すると…。

バチン！！

レビンは、九乃助の頬を思いっきり平手で叩かれた。
あまりにも、いきなり過ぎる出来事だ。
それには、九乃助どころか、純太の顔が固まる。
「えっ…」
純太とかに殴られたのなら、親父にも、ぶたれたことなかったのに！という九乃助だが、レビンにぶたれたのは初めてだったので唖然としていた。
ぶたれた頬が、赤くなっている。
「九乃助さんのバカ！！」
そう叫んで、レビンは駆け足で出て行った。

九乃助、純太の二人は唖然としている。

……そして、1時間後……

「なんやねん…、あの子娘、いきなりぶちやがって…」
元に戻った頬を、右手で撫でながら、九乃助は自分の愛車のCR－Xの洗車をアパート前でしていた。
左手で、ホースを持って車の洗剤を洗い流している。
そうしている彼の背後から、足音がした。
「九乃助、どうした？」
足音と同じく、声が。
九乃助が振り返ると、彼の妹分のキエラがいた。
彼女は、ちょうど買い物から帰って来たばかりのようで両手にビニール袋を持つ。
「洗車だよ」
機嫌悪そうに、九乃助は答えた。
「あっそ…」
キエラは、九乃助の機嫌の悪さに気づく。
それでも、彼女ももう一声言う。
「それにしても、あんたは幸せ者だよね」
「どこが…」
「レビンさ、数日前から、あんたのため、クリスマスまでに手編みのマフラー編んでたし」
九乃助の手から、ホースが落ちた。
血の気が、自然と引いてきた
そのせいか、彼の顔が青くなった。
「まったく、あんたも意外とモテるんだからね」
キエラは、九乃助の変化に気づかず言う。
九乃助には、大量の冷たい汗が流れる。
「おい…、さっき、なんて言った…」

もう一度、言うように九乃助は尋ねた。

九乃助の隣の部屋は、レビンの部屋である。
その部屋で、レビンは不器用ながらに編んだ自分のマフラーを見た。
そのマフラーは、けして綺麗に出来た物ではなかったが、彼女のなりに一生懸命編んだ物だ。
クリスマスに、九乃助に渡すために自ら編んだ。
そのマフラーを見て、彼女はつぶやいた。
「九乃助さんのバカ…」

「あああああーーーーーー！！！！！！！いらないとか、言っちゃったＹＯーーーーーーー！！！！！！！！！」

そうレビンがつぶやいている時、九乃助は叫ぶ。
自分のタイミングの悪さに、叫びまくっている。

……

以上のことがあり、現在、レビンは、九乃助にまったく口を聞いてくれない。
知らなかったとはいえ、プレゼントを完全否定した九乃助は罪悪感に浸る。
だから、九乃助はせめてもの罪滅ぼしとして、彼女へのプレゼントを買いに高級ブランド店の店前に居る。
だが、購入出来るわけもなく、ヤンキー座りをして煙草を吸いながら己の財布を見つめている。
「まさに、サンタ苦労す」
果たして、九乃助の運命はいかに。

※「サンタは居ないとか言うな！！サンタは、オレだ！！！！」

と、言える位の男になりたいものです。

……

続く…

＋1話「サンタ否定を継ぐ者」（後書き）

粗末で、手数の掛かる作品ですが、とりあえず12月25日まで続けるつもりです…。

＋2話「反逆の九乃助」

……

あの事件から、1日経った。
未だに、レビンは、九乃助に話しかけて来ない。
毎日のように、顔を合わせていたのに、まったく顔も合わない。
たった一日で、ばったりだ。
それほど、彼女はショックだったのが解る。
同時に、罪悪感で九乃助を苦しめる。

……

「大体、オレだって、あんなこたぁ言いたくねぇやい！！知らなかったんだよ！！しかも、レビンだって、言わなかったろうがよ！！！！あああああーーー！！！！！俺が悪いのかよ！！タイミングが悪いんだろう！！！！クリスマスってレベルじゃねぇぞ！！クリスマスが何だ！！そんなの宇宙規模に考えれば、大したことないだろうが！！！って、叫ぶ夢を見た…」
と、武田の目の前で九乃助が言う。
武田はそれに対して、昼食を取りながら聞くが無言。
ちなみに、ここは武田の仕事先の高校の職員室だ。
昼休み中に、昨日までの事情を話したのだった。
さすがの武田も迷惑がっている。
「ってことは、あれか…。お前、レビンたんと揉めてんのか？」
「そうだ」
そうキッパリ、九乃助が答える。
すると…。
「そりゃ、不幸だったな…」

武田は、そう言う。
同時、この男の思考回路が始動。
（今まで、九乃助とレビンが言い感じだった→今、揉めてる→レビンは、九乃助のことが嫌いになった→傷ついた彼女を、オレが慰める→オレのターン！）
まるで、航空機のエンジンのように武田の頭が回転した。
「お前、今よからぬこと考えたろ」
「！」
だが、即効で九乃助に見抜かれた。
長年の付き合いだから、すぐ解るのだ。
「じゃあ、帰るね」
そう言って、九乃助は職員室から去ろうとしている。
「なにしに来たんだ…、貴様」
去ってゆく、九乃助の背中を武田は見つめた。
ちなみに、昼休みの時間はとっくに終わり、武田はろくに飯も食えないで授業に出た。

……

九乃助は高校から出て、商店街を歩いている。
街は、クリスマスシーズン一色だ。
様々な店が、クリスマスの装飾をしている。
それが、九乃助の怒りを促進させる。
「なにが、クリスマスじゃ…」
虚しげに呟いた九乃助は、ため息をつく。
そして、虚しげに空を見げた。
雪が降らない、この街を象徴するような雲行きだ。
九乃助は思った。
あの器用じゃないレビンが、自分のために、内緒にしてマフラーを作った。

それは、とてつもない苦労であったろう。
しかし、それを自分は知らなかったといえ侮辱した。
あくまで、自分の主観だけで語ったことで、彼女を傷つけた。
「…」
そう思うと、急に九乃助は、彼女に一言謝りたくなった。
許してくれなくとも、謝罪だけはしたい。
和解の方へと、彼の思考回路が動き始めた。
その時…。

「クリスマスに、女と喧嘩する奴はバカだよねー」

九乃助の背後から、そういう低い声が聞こえた。
「！」
その声の方に、首を向けると…。
長身の男と、小柄な少年の二人組が居た。
たぶん、さっきの言葉は長身の男の方が言ったのであろう。
「なんで、そういうですか、マサイさん…」
小柄の少年が、そう言う。
「クリスマスって言えば、恋人たちの聖夜だろうが。そんなイベントに、喧嘩する奴の神経って信じらんねぇー。そうじゃなくとも、気づかないで女泣かすやって、バカってレベルじゃないなー。たぶん、そういう奴って、『ガ〇ダムは、ゼータまでしか認めない』とか言ってんだよなー。更には、嫌いな食べ物がピーマンで、水虫持ちで、『エクソシスト』の首回転シーンでトラウマ持ってて、昨日、シャンプーとリンス間違えて、2回シャンプーしちゃったりするんだよねー。しかも、１９９９年に地球滅びると思って、家の庭に地下シェルターを本当に掘ったりちゃってんだよなー」
長身の男の言葉すべてが、恐ろしいほどに、九乃助に当てはまった。
そして、九乃助は唖然としている。
「そういう男になるんなよ、カジン」

「あんたの発言に、当てはまる人なんて居ませんよ…。居たら、よっぽどですよ」
小柄の少年が、そう切り捨てて言う。
九乃助は、全身が灰色に染まった。
なんというか、真っ白になっていた。

……

九乃助が灰になって、しばらくして…。
キエラは、レビンの部屋に居た。
さすがに、昨日のことを重く見たキエラは動かざることを得ない。
「大体、九乃助だって悪気があったんじゃないしー。それに、九乃助をあんな風にしたあいつの親父さんが悪いんだしさー。許してあげなよ」
大人の意見で言うキエラ。
少し時間が経って、気持ちが戻ってきたレビンは彼女の言うことを真に受ける。
「そうだよね…、元はといえば、私が内緒にしてたんだし、九乃助さんが悪いって訳じゃないよね…」
やっと、レビンは九乃助を許す気持ちを持った。
それには、キエラは安堵の表情を浮かべる。

……

レビンは謝罪しようと思って、九乃助の部屋に入った。
付き添いで、キエラも。
部屋に入ると、九乃助は部屋で体育すわりをしていた。
あの長身の男の言葉に傷ついて。
その傷ついている様を、純太は無言で見つめている。
「あれ、どうしたの？」

と、九乃助の様子について、純太に聞いた。
「今帰ってきたら、こうなってた…」
そう純太は言う。
どうやら、かなり落ち込んでしまっている。
「あの…、九乃助さん」
謝罪に来たレビンが、九乃助の方に近づく。
すると、その足音で九乃助は振り返る。
「…」
振り返った九乃助の顔には、滝のような涙が溢れていた。
そして、ものすごくゲッソリしている。
これには、３人驚く。
「あんた、どうしたの…」
キエラが驚いて言う。
レビンも驚いて、言葉が出ない。
滝のようにあふれ出る涙を流しながら、九乃助はレビンを睨む。
そして、口を開いた。

「お前なんか、嫌いだぁあああああーーー！！！」

そう大声で叫んだ。
同時に、体育座りを止めて飛び出すように駆けた。
その速さは、短距離走の選手のような瞬発力だ。
まるで、嵐のように部屋から去る。
これには、３人は固まった。
もう、どうしていいか、解らなくなった。

しかし、一番ショックだったのは、お前なんか嫌いだーと叫ばれたレビンだと言うことは言うまでもない。

……

続く…

＋3話「篤元のオタク力（ちから）」

……

状況は、最悪になった。
もうすぐで、和解できそうだったのに。

……

問題が起きてから、二日経つ。
昨日、名も知らぬ旅人二人に罵られ、落ち込んで泣きじゃくった九乃助は、篤元豪のマンションに転がり込んだ。
そのとき、九乃助は『オタクくせぇ部屋だな』と篤元の部屋を評した。

そして、本日は豪の部屋のソファーで、九乃助は大いびきをして眠っている。
豪は迷惑していた。
九乃助は、いきなり上がり込んできて、人の部屋で酒飲みを始めて、今朝に至っている。
「おい！迷惑してんだけどよ！！」
と、豪はソファーで眠る九乃助を横目で携帯に向かって叫ぶ。
携帯の先は、純太だ。
「すまない、篤元殿…」
「スマンで済んだら、シ○ィーハ○ターは仕事にならんし、ル○ンはとっつあんに追われんわ！！」
オタク篤元豪が、自分のボキャブラリィから必死に怒りを伝えた。
その怒りが、十分伝わった純太はこう言った。
「解ったよ…、許してもらおう思って買ってきた『エビフライ伯爵』

フィギュアは要らないか…」
「許すよ」
篤元豪、来年で二十歳は一瞬で許した。

……

「いやー、貴様の部屋は個性的だなー」
と、昼過ぎに目を覚ました九乃助は、缶コーヒーすすりながら部屋を見渡し言う。
ちなみに、豪のリビングは、いろんなフィギュアで一杯だった。
「頼むから、部屋にツッコむな…」
泣きそうな声で、豪は言う。
「そんなことより、純太から聞いたよ…。レビンちゃんと揉めた挙げ句、彼女に嫌いだー！！と、泣きながら叫んだんですってね…」
そう言うと、九乃助の顔は固まった。
ちなみに、九乃助は悪気があって言ったのではなく、落ち込み過ぎたのと、興奮してたのが、ジャストミートして口から勢いで言ってしまったのだ。
要するに、口が滑った。
せっかく、和解できそうだったのに状況が悪くなってしまった。
ちなみに、そのことを九乃助は恥ずかしく感じている。
その心境を例えると、エッチな漫画を勢いで買ったのは良かったが、しばらくして…、『なんで、これ買ったんだろう…』という、若い男子がよく味わう感じだ。
我に戻った九乃助は、豪に問う。
「あのよ…、純太なんか言ってたか…？」
間接的に、『レビンなんか言ってたか…？』という意味である。
「あんたが泣き叫んだ後、同じように、レビンちゃんが四時間ぐらい泣いてた。だそうです」

業務的に、豪は答えた。
九乃助は、もの凄い勢いで血の気が引いた。
片手に持っていたコーヒーが、手から離れ床に落ちる。
琥珀の液体が、豪の部屋に床に飛び散る。
「九乃助さん…」
と、真剣な顔をした豪が九乃助を睨んだ。
その表情は、九乃助がしたレビンに対する行いを責めるような冷たい表情である。
「なんだよ…」
非難を送るような豪の顔に、九乃助は怯む。
「床に、コーヒーこぼすな…」
豪は、泣きながら言った。
マンションの床に、コーヒーが池のように広がっている。

……

それから、しばらくした午後の3時。
マンションから出た豪の青いインプレッサが、街路地を駆け抜ける。
目的地は、九乃助の住むアパート。
「とりあえず、謝りに行きましょうよ…」
と、インプレッサに九乃助を乗せて、豪はハンドルを握って言う。
助手席の九乃助は、複雑な表情だ。
「なぁ…」
窓を眺めながら、九乃助は言う。
「はい？」
「レビンの奴、許してくれるかな…。あんなひどいこと、言っちまってさ…」
そう豪に聞いた。
傲慢な態度だった九乃助が、急に不安そうに豪に聞く。

それは、あまり見たことのない心配した様子だった。
「大丈夫ですよ…。あんた、どんな時だって、彼女を守ってきたじゃないですか…」
豪は、車のシフトレバーを握りつつ言った。
彼なりの九乃助への慰めだ。
その言葉に、九乃助は窓を眺めていた首を、豪の方に向けた。
そして、九乃助は口を開く。
「お前、運転下手だな…」
「…」
照れくさい台詞を言った豪の顔が、引き攣った。
同時に、やっとアパートが見え、到着。

……

『ただいま、留守にしています。　ｂｙ　レビン』

彼女の部屋の扉に、こんな貼り紙が貼られていた。
やっとの思いで来た九乃助、豪は唖然とする。
二人とも、彼女の部屋の前で固まる。
真っ白になった。
「おい…、これって…」
九乃助が、ガクガク震えながら豪に問う。
「どう見ても…、は…、もん…、失踪…、です…。ありがとうございました…」
彼も震えながら言う。
この二人は、小1時間、ガクガク震えっぱなしだった。

……

ちなみに、レビンはキエラ、純太と共にショッピングに行ってた。

あの貼り紙は、別に深い意味なく、留守にするとの告知で貼ってただけだ。

……

続く…

＋4話「レビン・ハチコの憂鬱」

……

先日、レビンが失踪したと勘違いした、九乃助、篤元はもう信じられないくらい慌てた。
しかし、当のレビンは、純太、キエラと共に映画を見に行っていた。
よって、携帯は繋がらない。
みんなも、上映マナーは守ろう！

……

『前略、おふくろ殿。
私、焼野原九乃助は、１９歳に満たない少女を悲しませました。
そのせいで、彼女は失踪し、私はとても罪悪感に追われています。
携帯電話すら、かからないのです。
もう彼女は、どこへ行ったのでしょうか。
だから、私は彼女を探しに親友の篤元君と共に、彼のインプレッサで思い当たる場所すべて行きました。
ですが、彼女は何所にも行きません。
それでも、私は諦めずに探し続けました。
すると、不思議な現象が起きました。
数時間前まで、私は関東のＳ県に居たのに、気づけばどうでしょう。
なんと、北海道の大地に私は、今立っています。
『水曜どうでしょう？』で見た雪景色が広がっています。
彼女を探しに行ったはずが、気づけば、北海道です。
これは、本当にどうでしょう？
隣に居る篤元君が…。
「話が違うぞ！！なんで、北海道やねん！！！っていうか、運転代

われ！！！」
と、雪が降ってるせいか、ハシャイでいます。
しかし、私は雪が降るだけで、はしゃぐほど子供ではありません。
彼女が見つからないのです。
どうすれば良いのでしょうか。
とりあえず、カニ食べてS県に帰ろうと思います。
カニの代金は、篤元君持ちで。
PS、ミスター（鈴井さん）は、今なにしてるだろう』

という、手紙を九乃助は北海道で書いた。
気づいたら、北海道が目の前だった…と、丸1日運転させられた篤元豪は語る。
ちなみに、二人は防寒具がないので死にそうだ。

……

その頃、北海道の雪景色とは違って、雪の降らないS県。
九乃助が北海道に迷う原因を作ったアパートのレビンの部屋に、数名の人が見えた。
キエラ、純太、桐谷、武田、レビンの5人がコタツを囲んでいる。
もちろん、この5人が集まったのは、先日から九乃助の暴走問題だ。
さっきから、みかんを食べつつ、論議を交わしている。
「さすがに、あれはヒドイ！！」
と、みかんを口に入れながら、コタツをキエラは叩く。
その発言に、武田は頷く。
「女の子、泣かす奴は人類の敵だね。あーいう奴は、生きていちゃいけんだ」
武田は、そう言う。
「僕も、同感だね。前から、九乃助さんは、僕にパチンコで無駄遣いすな！と煩かったからね」

と、純太が言う。
「いや、それは貴様が悪い」
武田が、純太にツッコんだ。
桐谷は、なにを話していいか解らないので、レビンの部屋にあった漫画を読みふけってる。
問題の発起人のレビンは、下を向いている。
なんというか、彼女以外の３人は勝手に盛り上がってしまっている。
レビン本人は、九乃助が自分に対して嫌いだー！！と叫んだことで傷ついてはいたが、それ以上に、元はといえば自分が悪く、それで九乃助が悪い者みたいになってしまい、嫌いだと言われても仕方がないという気持ちがあった。
今まで、どんな時があっても、自分を助けてくれた九乃助を簡単には嫌いになれなかった。
また、助けてくれたからと理由だけじゃなく、嫌いだと言われても、彼女は九乃助のことが好きだった。
だから、彼女はどうしても九乃助に逢いたがっている。
しかし、その気持ちを、他の３人は気づくわけがなかった。

……

続く…

＋5話「D（ですから），M（マジで），C（風邪気味なんです）」

……

気づけば、本日はクリスマスだ。
作者もビックリ。
そんなわけで、やっと九乃助、豪は自宅のアパートに帰還。
後に、二人は…。
「カニが、おいしかったっす！」
と何故か、体育会系風に答える。
だが、同時に二人には大きな試練が待ち受けていた。

……

北海道から九乃助、豪はクリスマス・イブの午後7時、アパートの前に帰還した。
ちなみに、二人が交代交代で運転したインプレッサはボロボロだ。
たった数日で、二人の使った金額は底知れぬ。
「はぁはぁ…」
さすがに、半端ではない移動距離に二人はボロボロだ。
特に、豪の疲労は半端ではない。
「なんとか、帰って来れましたね…」
疲労困憊の豪が言う。
「ああ…、というか、さっき純太に連絡取ったら、レビンは普通にアパートに居るそうだ…。失踪などしてない…」
九乃助はそう言う。
つまり、無意味に北海道に行ってたと言うことを認めざる終えなかった。
そう言われ、気が抜けたせいか、そのままインプレッサの運転席に

倒れこむ。
よっぽど疲労が、溜まっていたようだ。
九乃助は、それを尻目にアパートに向かう。
緊張感を持ちながら、アパートの階段に足を踏み込む。

……

その様子を自室の窓からの景色で、キエラは気づく。
レビンを困らせた憎き九乃助が、数日の間を空けて現れた。
「あいつ…」
九乃助は、レビンの部屋に向かう。
なんて言うのか予想できないが、とにかく、この最悪の状況に終止符が打つ時が来た。
そう彼女は、自室の窓を眺め思う。

……

コン！コン！

九乃助は、辿り着いたレビンの部屋のドアを叩く。
自分達を、北海道へ向かわせた例の貼り紙はない。
「いないのか…」
この無反応さに、九乃助はそう思った。
その時…。
「はーい」
やっと、レビンの声がした。
「っ！！」
その声で、九乃助は身構える。
彼女に酷い事を言ったのだ。
なにされても、文句は言えない。

覚悟をした。
ガッチャッ！と、ドアノブが回転する。
そして、ドアが開く。
九乃助は、唾を飲んだ。
静かに、ドアが開いてゆく。
これだけなのに、緊張感があった。
そして…。

「…！」

ドアが開くと、レビンが九乃助の目の前に現れた。
それには、双方驚く。
「…」
「…」
二人は、互いに沈黙した。
レビンは、目を大きく見開いて九乃助の顔を見る。
とても彼女の顔は、驚きで凍っている。
一方の九乃助は緊張のせいか、目眩がした。
同時に、吐き気、頭痛、寒気が彼の体を襲う。
よほどの緊張が、彼の体に走っているのか。
九乃助の足元がふらつく。
異様に、彼の体が寒気が襲う。
（まさか、ここまで緊張するとは…）
ふらつきながら、九乃助は思った。
レビンは、未だに大きく目を開いて驚く。
そんなに、先日のことがショックだったのだろうか。
彼女も震えている。
「九乃助さん…」
レビンが、やっと口を開く。
なにを言い出してもいいように、九乃助は覚悟した。

すると…。

「九乃助さん…、めちゃくちゃ顔が青いですよ…」

「へっ…」

レビンのまさかの第一声は、それだった。

顔が青い。

あまり言われないようなことを彼女は言った。

そして、九乃助は自分の顔に触れてみると…。

「えっ…」

自分でも驚くほど、顔が冷たい。

というか、急に悪寒、吐き気、頭痛が強烈になってきた。

鼻水も流れてくる。

これは、緊張と言うレベルではない。

「はっ！！」

九乃助は思い出した。

先日、北海道への不眠不休での移動。

そして、防寒具なしでの北海道に居た。

さすがに、これでは…。

やっと、自分が身体へのダメージの深刻さに今、気づいた。

「ふふふ…、ははは！！！」

九乃助は、涙を流して笑い始めた。

これには、レビンは焦る。

何故、笑ったか解らない。

ただ挙句の果て、このオチか…と思った九乃助は思ったのだ。

そのことを悟ると…。

バタッ！

このまま、九乃助の意識は消えた。

そこから先のことは、目が覚めるまで九乃助は覚えては居ない。
彼にとって、今年のクリスマスプレゼントは、北海道での体調不良だったことは言うまでもない。

こうして、イブの夜は更けた…。

……

続く…
次回、完結編

＋6話「ＣＢＸの鼓動は愛」

……

焼野原九乃助は思う。
思えば、子供の頃言われた父の一言を、いつまで引いているのはどうかと…。
そんなんだから、いつまでも十代の子供と変わらないのだろうか。
ふと、彼の脳裏に高校時代のことが思い出される。

脳裏に映し出された場所は地元に居た頃、よく喧嘩に負けた時に気晴らしにタバコを吸いに来た川原だ。
タバコを吸う焼野原少年は、川原の草むらを眺めていると、ある物を発見した。
「ん…」
そこへ、タバコを咥えながら近づいて見ると、ボロボロになったバイクが捨てられていた。
かなりの年代物のようだ。
まだ動くのかなと思い、彼はバイクを立て直して引っ張っていく。
バイクに興味ない九乃助少年は、このバイクの名が解らなかった。
とりあえず、近くのバイクに持って行った。
店主の話によると、『ＣＢＸ４００Ｆ』というバイクだ。
このバイクは、暴走族関係に人気の車両で、このバイクの奪い合いが起きるほどの代物。
しかし、九乃助が拾ったＣＢＸは、もはや、そんな奪い合いが起きるほどの価値が見当たらないほどにボロボロだ。
だが、九乃助は気に入ったのか、このバイクの修理を頼んだ。
エンジンは生きているようだったので、まともに走らせるまでに年月はかかったが、このＣＢＸは復活した。

バイクが復活すると、九乃助は跨って走らせる。
免許はないが、夢中になって、毎日バイクを走らせた。
バイクで見る景色と、風が顔に当たると、この上なく気持ちが良かった。
クリスマスの日も、彼はバイクを走りまわした。
その時、彼は地元の峠の山頂に着く。
すると、この高さから自分の住む街の景色が見えた。
夜だったせいもあり、街の光は美しく輝き、九乃助少年の心を感動させた。

そんな過去の出来事の夢を、九乃助は熱にうなされながら見た。
すると、同時に彼の頭に、とある考えが浮かんだ…。

……

レビンとキエラが、市街の病院へと足を運んだ。
理由は、九乃助、豪の見舞いだ。
昨日、九乃助、インプレッサの運転席で生死を彷徨っていた豪が、過労と高熱の風邪で倒れたので救急車を呼んで病院に入院させた。
医者もどうしていいか解らないほど、大変だったようだ。
おかげで、もうクリスマスイブどころではなかった。
そのことを、キエラは愚痴る。
「ああー、クリスマスパーティでもやろうと思ってたのに…。なんで、あのバカ二人のせいで…」
「とりあえず、無事で良かったじゃん」
そう、レビンは言う。
だが、未だに彼女の心には、九乃助が勢いで叫んだ『お前なんか、嫌いや！！』との言葉が残っている。
だから、複雑な表情だ。
そんな感じで、二人は病院へと入る。

このまま、九乃助の居る病棟へと向かって行った。

……

「…」

「…」

病室に着いたレビン、キエラの表情が凍った。

看護婦、医者も困り果てた表情をした。

何故なら、九乃助の病室のベッドには、九乃助本人ではなく１／１２スケールのプラモデル「ガ〇ダム（１メートル５０センチ）」が置かれていた。

ガ〇ダムが雄雄しく、九乃助のベッドで眠っている。

「九乃助さんが、連邦の白い奴に…」

と、レビンは言う。

キエラは顔が固まる。

そして、医者が言う。

「高熱で倒れた焼野原さんが、失踪しました…」

……

失踪した九乃助を探しに、二人は病院から出て行った。

「あのバカ、どこ行きやがった！！」

これを置かれると困る…との医者の言葉でガ〇ダムを背負いながら、キエラは怒り叫ぶ。

ちなみに、これはとても重いので、背負ってアパートまでの住宅路を歩くのは苦痛でしかない。

重さの数だけ、キエラの怒りを増させる。

「どこ行ったんだろう…」

レビンは、そう言った。

九乃助は昨日、なにしに自分の部屋に来たのだろうか…。

こうのような考えが、彼女の頭に浮かぶ。
「重いよ、これ！！どうせだったら、動くプラモ置けよ！！」
キエラは額に、血管を浮かせる。
すると…。

ブォン！！ブォン！！！

大きなマフラー音が響いた。
その音が、二人の耳に入る。
イライラしてるキエラには、うるさく感じた。
そして、二人は音の方に首を向けると…。

「よぉ…」

二人は驚いた。
振り向くと、病室から抜け出した九乃助がバイクに跨っている。
「九乃助さん！」
いきなりの九乃助の登場で、レビンは驚く。
キエラは、九乃助の出現の怒りで血管を浮かせる。
彼女の背中のガ〇ダムが、微妙に目が光ったぽい感じになった。
バイクは、九乃助の高校時代修復させたＣＢＸだ。
そのバイクを病院から抜け出して持ってきてまで、二人の目の前に出現した。
「ふざけんな！お前！！このガ〇ダムなんだ、バカヤロウ！！！」
キエラは背中のガンダムを背負いつつ、キレ叫ぶ。
そんなキエラを無視して、九乃助はレビンの顔に目を向ける。
レビンは、九乃助から目を逸らす。
すると…。
「ちょっと、乗れや…」
九乃助が、首を動かしてバイクに乗るようにレビンに指示する。

その一方で、キエラは叫んでいる。
だが、彼の耳のは入っていない。
レビンは指示されたように、九乃助のバイクに近寄る。
そして、バイクのリアシートに跨った。
彼女が乗ると、九乃助は、このままエンジンを始動せる。
あくまで、キエラを無視して。
「おい！こら！！無視すな！！」
ＣＢＸは、キエラを無視したまま、九乃助、レビンを乗せ動き始めた。

……

九乃助は走り出したＣＢＸに彼女を乗せ、ただ黙って、バイクを飛ばしていた。
レビンも同じく、黙って九乃助にしがみついている。
街中から、景色がずっと流れている。
景色は流れ続け、周囲は建物から森林に囲まれるまでになった。
そのせいか、空気がとても澄んでいる。
周りに居た車の数々は、いつのまに減っていく。
ついには、車は見えなくなった。
すると、景色も森林地帯から峠道路へと変化した。
太陽も、いつのまにか沈み暗くなった。
それでも、九乃助は黙り込んで走り続ける。
レビンも黙り込む…。

しばらくして…。
ついに、バイクが止まった。
すると、レビンは絶句した。
「綺麗…」
バイクに跨る彼女の目に映ったのは、峠の山頂の高さから見える自

分達の住む街の灯火だ。
キラキラと景色は光っている。
その美しい街の光に、彼女は言葉を失う。
この景色は、高校時代に九乃助が発見した街の光だ。
九乃助は、これをレビンに見せたかった。
だから、病院を抜け出してバイクを駆け続けた。
これは九乃助なりの罪滅ぼしと、精一杯の彼女へのクリスマスプレゼントだ。
レビンは、ただ街の景色に見惚れる。
そして、九乃助の気持ちが理解できたのか涙が零れた。
「クリスマスも、悪くねぇな…」
九乃助は、彼女から顔を離して言う。
実言うと、彼は照れている。
我ながら、臭い真似をしたな…と思うからだ。
だから、顔を逸らした。
「九乃助さん…、あの…」
彼女は、なにかを言おうとする。
今まで、ずっと謝りたかったからだ。
すると…。
「ごめんと言うなよ…。お前のごめんなさいは聞き飽きた」
そう九乃助は、彼女に言う。
すると、更に彼女の目から涙が溢れた。
「ありがとう…」
そう言って、彼女は手で自分の目を拭う。
彼女を見て、九乃助は微笑む。
すると…。
「うっ…」
九乃助が、急にふらついた。
「九乃助さん!!」
レビンが驚く。

九乃助の体に異変が起きた。
急に悪寒、吐き気、頭痛が強烈になってきた。
鼻水も流れてくる。
これは、先日からの風邪の症状だ。
今まで、よほど夢中だったのか、風邪の症状は麻痺してたのに、今頃になり緊張が解けたせいか、また高熱に襲われた。
「レビン、医者を呼ん…」
そう言いながら、九乃助はふらつく。
すると…。

バタッ！

このまま、九乃助の意識は消えた。
レビンは、倒れた九乃助の元に駆けつけ叫んだ。
「九乃助さん！！目を覚まして！！ここ圏外！！！白目向かないでよ！！！」
そう彼女は、必死に叫んだ。
だが、いくら叫んでも、九乃助が目を覚ましたは、ちかくを通りがかった人に呼んでもらったレスキュー隊が来るまでなかった。
このレスキュー隊が来るまでの1時間について、レビンは『とても、地獄でした。本当に、地獄でした。地獄ってレベルじゃありません』と彼女は答えた。

そして、後日に病院に運ばれた九乃助の首には、レビンが編んだマフラーが巻かれていた。
このマフラーはひどい出来ではあったが、九乃助曰く『地獄の中の天国』と答えた。
こうして、二人のすれ違いから起きたクリスマスの事件は、これにて終焉となる。
一番迷惑したのは、ガ〇ダム背負わされ、クリスマスパーティ出来

なかったキエラと、誰も見舞いに来なかった篤元豪だと言うのは言うまでもない。
篤元豪は、こう語る。
『メイドも良いけど、ナースもたまりませんな』
……
完

＋6話「ＣＢＸの鼓動は愛」（後書き）

６日連続の時事連載となった本作を読んで頂き、ありがとうございました。
ただ６日連続だったということで、多少、作品の出来が荒く、誤字、脱字がありましたら、本当に申し訳ございません…。
本家の復活は先ですが、この作品のご愛顧よろしくお願いします…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2993b/

フリーナイン　～焼野原青年の悲劇～

2010年12月24日14時27分発行